小猿の恩返し

こざるのおんがえし

作:近藤せいけん

こざるのおんがえし

むかしむかし、さがみにくににすすがやむらにこうすけじいさんとおばばのきぬさんがすんでいました。
ふたりはとてもしんせつでこころやさしいろうふうふでした。
あるひのこと、ちかくをながれるこあゆかわにこうすけじいさんはさかなつりにいきました。
そのひはかぜのつよいひで、かわめんもすこしなみだっていました。
つりざおのうきもよくみえず、さかなもつれません。
かわにちかい、きりたったがけのうえのきにたくさんのさるのいちだんがえさをもとめてきていました。
「あぁ～きょうはぜんぜん、つれないなぁ～しょうがない、かぜもつよいし、ここらであがるとするか」
そのときです、いっぴきのこざるがこまかいわざにとびうつるとどうじに、「ぽきん」とねもとからおれてしまい、こざるはかわに「ドボン～」とおちて、はやいながれのなかをうかんだり、しずんだりしてながされてゆきました。
たくさんのさるがそのあとをおいかけてゆきました。
「キャッ、キャッ、キ、キ-キ」とおおきなさけびこえがさんかんにこだましました。
こうすけじいさんがすぐにきがつき、いそいで、ながされてゆくこざるをおいました。
ながいつりざおをのばしました。
「さあ～このさおにつかまれ。しっかりとな！」
こざるはひっしにさおにつかまりました。
「さあ～きしによせるぞ！」
「よいしょ、よいしょ、どっこいしょう。それ、それ、どっこい、どっこい、よいしょ」
とひっぱりました。
やっとのおもいで、きしにこざるはたどりつきました。
たくさんのさるがいっせいに「キァーキァーキャッ、キーキー」
となきこえをあげ、まるでよろこんでいるかのようでした。
なかまのさるがみまもるなか、かわはらをよちよちあるき、じっとこうすけじいさんをみてからやまにもどってゆきました。

「さあ、いえにかえろうか。ばんのおかずはつれなかったが、よきことをした」
こうすけじいさんはいえにたどりついた。
「ばあさんや、きょうはなにもつれんでよ。てぶらじゃ」
「さようか、しかたなか。そういうひもありょう」
「さあ、じねんじょをすって、たまごであえ、そばがきにしてたべようかね」
「うんだ、そうしてくれ」
あきのひはつるべおとし。あたりはすぐくらくなり、やがてよるになりました。
「さあ、そろそろねようか。きょうはつかれた・・・」
よなか、そとでなにかさわがしいおとがしたが。
「おじいさん、なにかおとがしているが、なんじゃろうね・・」
「なに、かぜのせいじゃよ。ねよう、ねよう」とまたねむりについてしまいました。

そとでは、たくさんのさるが「キ、キ、キキー、ドンドン　ドンドン　キキー」と
なにかをはこんでいました。
よくあさ、おひさまがあがると、おばあさんがあまどをあけました。
めをこすった、おばあさんが
「あれ～あんりゃあ、なんじゃ・・・おたまげた。おたまげた」
「じいさん、じいさん、はようおきてみよ。はよう、はよう」
とおおごえでよびました。
「なんでえ～、ばあ～さん。なんでえー」
「あれじゃ、あれじゃ・・・」
「わぁ～おたまげた。たくさんのかきのやまじゃ。くりのやまじゃ。どんぐりのやまじゃ」
「どうしたんじゃ・・・」
「なにがおきたのじゃ・・・」
しばし、おじいさんもおばあさんも、たくさんのかきのこやまじゃ。くりのこやまじゃ。どんぐりのこやまにみとれていました。
ふ～と、にわのけやきのきにめをやると、ちいさなさるとははざるとおぼしきにひきのおやこざるがじっと、おじいさんおばあさんをみつめていました。
おじいさんははっと、きがつきました。
「きのうのこざるじゃ。そうじゃ、きのうのこざるがおれいにきたんじぁ。そうじゃ、きっとそうじゃ」
おじいさんはおばあさんにきのうの「こざるをたすけたはなし」をしました。
「ふあ～あん、そんなことがあるんじやなぁ」
「じいさんや、あそこ、かきのこやまのうえになにか「つづみ」のようなものがあるよ」
「ほんとうじゃ、どおれ、てにとってみよう」
じいさんはかきのこやまのうえから「つづみ」のようなものをてにとり、いっかい、たたいてみました。
「ぽん～」となんともうつくしいおとがしました。
すると「つづみ」のなかから、おおきなこめだわらがいっぴょう「どん～」ととびでてきました。
おばあさんがこめだわらをあけると、げんまいがぎっしりつまっていました。

「わあ、おたまげた。げんまいじゃ、げんまいじゃ」
おじいさんが、「ぽん、ぽん」とにかいたたくと。
こんどはおおきなこめだわらがにひょう「どん～どん～」とびだしてきました。
「すごい。すごい。こんなにたくさんのおこめ。はじめてみた」
おじいさんとおばあさんは、それいじょうは「つづみ」をたたきませんでした。
おじいさんはさるのおやこにおれいをいおうと、にわのけやきのきをみあげると、すでにおともなくおやこざるはさっていました。
おじいさんとおばあさんは、たくさんのかきのこやま。くりのこやま。どんぐりのこやまを、かきはほしかきにして、こめだわら、くり、どんぐりはこやにたいせつにほかんをしました。
「ばあさんや、この「つづみ」はやまのかみさまのものじゃ。あのさるはやまのかみさまのおつかいじゃ」
「わしらはどうにか、やまのかみさまのおかげで、しぜんのめぐみをうけいきてゆける。それでじゅうぶんじゃで」
「このうちでの「つづみ」は、やまのかみさまにおかえししょう」
「そうじゃね。それがいい、それがいい」
きよらかな、こころやさしいふたりは、おやまのしぜんにだかれて、いつまでもしあわせにくらしました。